

清泉カトリック センターだより

第20号
平成28年4月2日
【編集・発行
カトリックセンター】

復活祭

キリスト教は、十字架につけられて死んだイエスが三日後に復活し、今も生きて我々とともにおられることを信仰箇条の中心としています。イエスの誕生にふれていない福音書はあっても、復活に関しては、すべての福音書が叙述していることからわかるように、復活祭はキリスト教の教会行事の中でも最も、重要な位置を占めています。



「イースター」という名称

復活祭は、ギリシヤ語、ラテン語では「Pascha (パスカ)」と呼ばれ、ギリシヤ正教やイタリアなどのラテン系の国では、今日でも「パスハ」「パスカ」とこの名称を使用しています。「パスカ」とは「過ぎ越し」という意味で、イエスの死と復活の一連の出来事が、ユダヤ教のエジプト脱出の出来事を記念する「過越祭」に起こったこと、そして、ヘブライ民族を隷属の民から自由の民へと解放した事実、イエスによって、「死から永遠の生命への過ぎ越し」という新しい意味が上書きされたことを意味していると考えられます。

英語圏の国々で使用されている「イースター (Easter)」の名称は、春分の日を春の到来を祝う日とするアングロ・サクソンの春の女神「Eostre」に由来し、冬を超えて、新しい生命が芽吹く春と復活を融合させたとも言われています。

(R・T)

今月のお祈り

婦人たちは、安息日(土曜日)には掟に従って休んだ。そして、週の初めの日の明け方早く(日曜日)、準備しておいた香料を持って墓に行った。見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。

そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだカリライヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」

そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。

■ ルカによる福音書 第24章 1〜8節

復活祭って、いつ？

復活祭は、基本的に「春分の日」後の最初の満月の次の日曜日」に祝われるため、年によって最大一か月ほど日付が変動する移動祝日です。今年3月20日が春分の日で、ここに最も近い満月は3月23日。従って、今年の復活祭は、3月27日に祝われました。

